

第2分科会

地域における親子の居場所づくり、心地よさを求めて

241110to

1. はじめに 1.1 目的

最近、個の埋没傾向や住みにくさの改善として「居場所づくり」が全国的に展開されており、また現代文明と対比して伝統文化を重んじる傾向の一つとして古民家ブームも静かに定着している。古民家を核にした居場所づくりも目を見張るくらい賑わってきている。

著者は片田舎に住んでいるためか、世の中の動向を踏まえている訳ではなく、たまたまアニメ「おおかみこどもの雨と雪」(2012年公開)がヒットしたことで、アニメのイメージモデルとなった現存する中山間の古民家(花の家、お家)及びその周辺環境を保全する活動を当初から続けている。ただただ「ゆるゆるのんびり」と活動していたところ、遅まきながら、お家と周辺風景が期せずして「居する心地よさ」を親子で堪能できる場となって今日に至っていることに気づいた。そこで、このことが世の中でいう居場所とは違った様相にあるだけに、中山間におけるお家を介して繰り広げられるひと時を親と子どもの物語として紹介することにする。これが本稿の目的である。

1.2 問題の所在

親子の中山間でのひと時が何故に着目し論述するのか。それは、世の中の親子を取り巻く環境に種々問題があるから、といえる。本稿では親子物語の紹介とはいえ、今日的背景にも若干切り込むとして、論を進める。

(1) 親の視点から今日的様相を列挙(社会に向けての視点ともいえる)

多くの場合

多忙ゆえか、子どもには何かにつけ「早く」とせかす、怒りぎみ。

→何かと子どものせいにも→(親は後で後悔)

スマホで子守りもちらほら →(親はかまい過ぎ技術になれっこに)

遊びよりも勉強を →(親は将来のためにとと思って)

今の状況に批判的な場合;

何もしない。子どもの好きなように。昔のように。自主性尊重。

現代は「かまい過ぎ」、世の中全体がそう。

(2) 子どもの視点から

子どもは親を見て育つ →だから親は子どもを第一に。

親の顔色を伺うことまあり→気遣いではない、子どもは保身せざるを得ず。

遊びは自然行動、子どもの営み→体の成長、思考・学びへと本能的に磨かれる。

(3) 家庭では

安心・コミュニケーション; 共に食事、同じ食事。一つ屋根の下で共なる生活は安心感に。

家庭から周辺に雰囲気は拡散。街もいわば大きな家となる。

(4) 居場所とはそんな雰囲気が充満。雰囲気とは場と人がつくる。

お家では特にそう。場と人、場と親子の行動かそう。(だから著者は紹介したくなる)

第1章にて節1.3以降に理屈を述べ、第2章以降に実際の様相を記す。

1.3 お家・周辺の「人間と場の環境」構成

世の中、多くの問題が親子に降りかかっている。それは社会といういわば大きな環境が個の世界に押し掛かっているためである。ではお家の環境はどうか。そこで、子どもと社会の論ではなく、ごく身近な場での自然な行動に着目して、いわゆる古民家環境とは違った観点で論考する。

(1) 居場所は場における人の営みで成立；お家という居場所において、毎日実施(居場所提供)の必要性が分かっているにもかかわらず現実には難があり、ゆえに開催日を間引くことが多い。それでも、出向く方々(訪問者)は居場所に期待し、これに受け入れ側が応えている。そこでは、何気ない当たり前の自然な行動が可能となっている。だからこそ、お家では平日無人(管理人)体制でも目的が遂行できる。却って無人だから来場者がお家のオーラに導かれたような感覚になるのであろう。もちろん、有人管理の日には大いに盛り上がる。

(2) お家では、来場者自身が自ら場に関わり自ら営んでいる；受け入れ側はいつも無人であり、たとえ有人であっても、来場者とは同格であり、サービス提供側と受け入れ側といった認識はそこにはない。理由は、入場無料もあるが、「場の環境は皆のもの」という意識が潜在的にあるといういわゆる極自然な状況によるからである。

(3) お家とその周辺では、自然行動を誘発させる；これこそがお家・環境のなせる業である。以下に3点述べる。

第一は、お家という場には、人が長く住み営んでいた歴史が漂っている(お家が無人であっても人の息遣いが感じられる)ので、来場者があるような歴史に自然と包まれているかのようになる。第二は、古民家が森の中にひっそりと自然に溶け込んでいる。第三は、お家の縁側が家の外と内をつないでいる。人や大気のもろもろが縁側を介して出入りするので、訪問者は一段と自然の中に親しむことができる。

(4) お家へのアプローチが期待感を高揚させる；お家は山麓からは登坂山道となり、周辺の森の中、自然散策しながらの徒歩登坂となる(車もあり)。また取り付け道からお家へのアプローチも、別世界の入り口として雰囲気がいやがうえにも増している。これは何回も訪れても褪せることはない。

1.4 お家・周辺について概要

(1) アニメ「おおかみこどもの雨と雪」の概要；

大自然のもと、幼子(雨と雪)と母(花)がくりひろげる愛情物語。子どもは狼と人とのハーフであり、弟(雨)は狼の道を、姉(雪)は人の道を選択して巣立つ。小さなお子さんには、話の内容が理解不可だが、それでも物語の愛情は十分伝わっているとみている。

(2) 管理運営活動；

お家の維持管理、周辺の環境環境保全については、当初、当該の町が実施する機運もなく、ほそぼそと関係者で実施していたが、そのうち手伝う方々が増え、ならばとのことで2014年にNPOを設立。お家・周辺の一般開放により、来訪者とスタッフでつくるアニメ世界の保全と共に来場者には楽しい体験の一助を心掛けている。

(3) 情景；舞台は中山間のお家とその周辺。そこにあるのは、

- ・大自然；山あり、森あり、川あり、動植物、農環境(棚田・畑)
- ・人間環境；農村の暖かなコミュニティ、そんな自然や人間の環境のもとでの子どもの成長環境

2. お家の概要

(1) お家；富山県大岩地区で当初はハイカーの休憩家として開放。

2012年アニメのヒットでイメージモデル「花の家」の人気が増す。

(2) 来訪者；年間1万人、20~50人/日、GW時期200~400人/日

(3) 来場者の様相、お家・周辺にて；まずはくまなく家の中を一巡。思い思いの場に陣取る。

(4) 縁側、広間、和室、囲炉裏場、庭にて；

- ・和室・縁側；お茶飲み、お絵描き、絵本読み、時折味噌汁食、外雰囲気をぼんやり鑑賞
- ・大広間；食事、遊ぶ、描いた絵の掲示、芸の場
- ・庭；花壇の花鑑賞、外遊び
- ・森林散策
- ・囲炉裏場；夏以外暖を、時折食事
- ・畑；ジャガイモの植え付けと収穫
- ・ハイキング、城ヶ平山



花の家見取り図



写1 お家、外観、平面図、各部屋

3. じゃれつき、寝っ転がり

お家が広いので、じゃれたり、寝転がったり、子どもは自由奔放に行動。親も子を自由にさせている。制限する代物が無ければ、こうも自由に振る舞えるのか、ということである。



写2 左;玄関でじゃれつき 右;大広間で寝っ転がり

4. お絵描き

和室や縁側で、お絵描きに夢中の子ども。親も好きにやっておられる。そんな雰囲気が家内にあるものだから、もちろん大人もお絵描きに挑戦。主に、おおかみこどもを描くが、風景やお家外観のスケッチもままある。なお、右側の写真は雪ちゃんの絵である。



写3 左;縁側でお絵描き 中;和室で 右;雪ちゃんの絵

5. 読み語り

「おおかみこどもの雨と雪」の絵本が出版されている。この絵本を親が子に読み聞かせしていたところ、感極まって涙声になった。周りにいた大人たちももらい泣きで、ほろりと涙した。

いろんな方にどんなシーンが感動的かを聞いてみると雪上で親子が寝そべってるシーン、子どもの巣立ちのシーン等が人気のシーンという。



写4 左;絵本 右上・右下;本を見たり読んだり

6. 絵の鑑賞、芸の鑑賞

・展示；和室や縁側で描いた絵を大広間の壁に掲示。いろいろな方の絵を見る大人と子ども。
・芝居鑑賞；子ども遊びのアマ芸人が現れて、紙芝居を演ずる。子どもの大人も、紙芝居に物珍しく興味深く聞き入っていた。



写5 左：紙芝居講談中 右：壁面系の絵画鑑賞

7. 暖を取りながら

囲炉裏の部屋では、早春、晩秋、冬の時期にストーブで暖。お茶を飲んだり、ドンドン焼きをストーブ天端で焼いたり。銀杏焼も。

静寂な雰囲気の中で各家庭の方々がすわり、食す時は特に会話がはずむ。



写6 左：囲炉裏部屋で食 右：皆さんで歓談

8. 食の堪能

いつもは呈茶で皆さんと我らが歓談。時折来場の家主さんは「訪問の皆さんが折角来られたから」と振舞もあり。夏はスイカ、春秋では縁側にて汁物、晩秋には大広間で食事会。東京から偶然寄った女性たちもご相伴にあずかり、感激して美味しくいただきました。



写7 左：縁側で汁物食す 中：大広間で会食 右：縁側でスイカ食す

9. 内から外へ、外から内へ

縁側が家の内と外とのつなぎ役を果たす。子どもが外庭で遊んで中に入ったり、またその逆も。子どもは縁側が大好きである。そんな子どもにつられて、大人も出たり入ったりで、楽しんでいる。



写8 左：大人も子ども出入り 中：踊る子ども 右：子どもが縁側集る

10. 農の堪能

折角なら農作物を自らつくり育てることも。子どもには大きな体験と考えて、アニメでは主人公がジャガイモを栽培していたので、ジャガイモの植え付けと収穫の体験ができるよう、春蒔き秋蒔きの二本立で農体験を設定した。農作業は耕しから始まり、子どももいうに及ばず慣れない作業に

汗を流していた。さすがに収穫の時は、子どもはご機嫌であった。なお、耕し時、ある親子が親子とも主人公と同じコスチュームを着て参加し、大いに満足していた。



写9 左;植え付けのため畑の耕し 右;収穫でご機嫌

11. ハイキング

お家からはすぐそばに(裏山のような)城ヶ平山があり、よく小学校の課外活動としてお家をベースにお山にハイキング。お家からは鬱蒼とした森を突き抜けて山頂に至る。



展望抜群。名峰劔岳や我が町が展望できる。

写10 左;名峰劔岳 右;城ヶ平山山頂

12. ストレスを抱えたお子さん

選択登校児童の方も一家でやってこられる。皆さんはさすがにお家ではリラックスされていた。抑圧された学校にうんざりの子どもは、場や人の環境が醸し出す安心感に浸っておられた。特に、ストレスを内にためていた子は、すぐに「キッ」と声を発するので、すかさず狼の叫び声「ウー」でやってみてとおすすめる、リラックス気分になっていたようである。親御さんがお家のある上市町に引っ越したいとのことでした(現実には無理でした)。



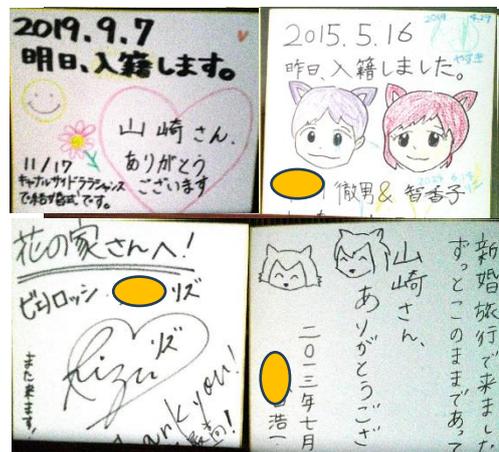
写11 お家そばの山林

13. 皆さんの声

(1) 子どもとの対話; ・小さな子供はアニメ世界と現実世界の区別がつかず、両者一体と認識しているためか、よく「雨と雪」に会いたい、と言いにやってくる。その時はすかさず、買い物に出かけていて今日は帰ってこないと返答。すると、つまんないのと、しょんぼりの一言。

・家出中学男子がママやって来る。花母さんに会いたい、悩みを聞いて欲しいと。まずは理由を聞く。アニメ世界と現実の区別を説明した。もちろん、親御さんもやって来られ、とにかく円満解決となった。

(2) 大人の場合;



写12 カップルからのメッセージ

・若い方；人生観が変わった、と感動あらわな若者、特に女性が少なからずおられる。何がそうさせるのか、花母さんの生き方に感動されたかのようである。また、カップルの場合、たぶん女性がリードして男性もまた感動しているようだ。とりわけLWのLWのカップルの方々は、幸せいっぱいなので「入籍した、ここでプロポーズ、新婚旅行はここが最初、等」の色紙を残しておられた。訪問者の多くが、そのような色紙を見てうっとりとしていた。なお、中年男性でも花母さんに惚れたという方がおられてびっくりだが。

・多くの方が家に備え付けのお家ノートに自由記載で皆さん書いていかれる。事細かく感想をかいいたり、感動を記したり、人さまざまである。

・いくつかびっくり毎を記す。面識もない家主の方に遠路はるばるお土産を持参の方(ままおられる)、ここを第二の古里にしますと東京の方の弁。人間模様はさまざまである。

14. おわりに

本稿では、アニメ「おおかみこどもの雨と雪」舞台モデル「花の家(お家)」において繰り上げられる「親子の自然な行動」や「それをなす人と自然の環境のありがたみ」を紹介した。

その意図は；・「居場所の兼ね備える要件に言及する」、

・「多くの居場所論、ひとつのあり方を「花の家」にて実践する」、

・「訪れる方々の心意気が自然と場の雰囲気醸し出す」。

その心は；・「なすがままの自然を心地よさとして満喫し楽しむ」、

・「それが親子の営み。それをご自宅に(多少なりとも)持ち帰り、
とにかく良い体験の積み重ねの一助に」、と願うばかりである。

こうしたことが可能になる要件は、次のとおりである。

お家の広い空間と周辺の自然、ローテク、お家の歴史(先住者が常に住んでいる感)、
先住者(オジちゃん・オバちゃん)の存在、内と外の連続(お家と自然)

訪問の親子は、お家にて「ヘー、ワー」の自然な反応をされておられる。そんな光景を見るにつけ、我ら「これが原点」かとニコリしながら、「人と自然と建築」なる環境をしみじみと心地よく感ずる次第である。

15. あとがき

本稿では、「日常生活の営みの充実」を主張し、たまたまご縁のある中山間での活動を報告とした。もちろん、この種の活動について都会の住みつらさ改善とか現代文明批判とかいった効率重視社会の改善を念頭においた活動も確かに必要と思っている。ここではあくまでも、日常の生活の充実を積み重ねていくことがまず第一としている。これが小さな物語の前段階となる「個々の物語づくり」そのものといえる。「注；新建の岩見良太郎先生が街づくりという小さな物語から都市づくりという大きな物語をつくるという論を提唱」。

また、この種の問題を専門家の役割からどう考えるかについては、現代文明批判にもっていき前段階として、市民の日常に寄り添う前にただ隣にいて十分のように思う。こうした充実こそが大きな物語づくりへのパワーになるかと思ひ、そんなアプローチがあってもいいし、そんなアプローチを地で楽しんでいる、という報告が本稿である。

最後にお願ひとして、皆様、ぜひ富山にある「お家」にお越しください。お子さんやお孫さんと一緒に。お若い方はカップルで。

A. 謝辞；本事業を進めておられる NPO の山崎理事長、川端副理事長、関係各位に感謝申し上げます。またお読みいただきました皆様にも感謝申し上げます。